専門領域の特徴

（一社）日本体育・スポーツ・健康学会

スポーツ人類学専門領域

スポーツ人類学専門領域世話人会

１．あらまし

スポーツ科学と人類学の学際的研究領域を持つスポーツ人類学は、人類学の中でも特に文化人類学との結びつきが強く、1974 年のアメリカの遊戯人類学会の設立によって独立した学問となった(ブランチャードとチェスカ, 1998)。スポーツ人類学の名称は 1988 年に出版された邦訳『スポーツ人類学入門』で原書タイトルの anthropology of sport がスポーツ人類学と翻訳されたことに由来する。その後、その名称は 1988 年に日本体育学会の専門分科会名となり、1998 年には日本学術会議に登録する独立学会名へ、そして 2009 年には中国、韓国、台湾、日本の会員から成る国際学会(アジアスポーツ人類学会)名となり現在に至る(寒川, 2013:1)。スポーツ人類学の研究対象は、「文化の一構成要素としてのスポーツ」であり、「労働、遊戯、ゲーム、レクリエーション、儀礼、闘争」や「療養や癒し」の受身的余暇活動まで拡がりをもつ。これは「スポーツ」の語源であるラテン語の deportare が「気晴らしする、遊ぶ」を意味していることに起因する(寒川, 2004:2-3)。研究方法はフィールドワーク等の文化人類学的手法や史資料ならびに一次資料研究が中心である。

２．内外の研究動向

本領域においてエスニックスポーツや身体に関わる活動を対象にした研究は、多様な問題系が含まれている。すなわち、エスニックスポーツ・身体文化のグローバル化、ナショナリズム、文化遺産化や観光化との関連において論じるものや、ジェンダー論、ポストコロニアル論、アイデンティティ論、文化化・社会化、実践論の立場から理論的に考察するものである。近年は、デジタル映像解析や AI による身体技法の記録・比較研究が進展し、伝統的な舞踊や武術の身体文化を新しい形で分析する試みも注目されている。スポーツ人類学においては、スポーツ、武術、舞踊、養生法等を文化的実践の複合体と捉え、グローバルな視点を踏まえながらも、それらを当該社会の歴史的背景や文化的文脈の中で読み解く姿勢が重要である。

近年の国内研究では、武術起源言説をめぐるナショナルな物語化の装置性や民俗舞踊の再創造過程を通じた文化遺産的役割の検討、または、社会的包摂・排除の装置としての格闘技の分析などが進められている。さらに、国際開発や国際貢献における援助言説とローカル実践の交錯を検討する人類学的研究も進展し、グローバル化・ポストコロニアル論的視座から身体文化を多面的に再定位する取り組みも進められている。

他方、国外においても、Besnier & Brownell（2012）が示すように、植民地主義、グローバリゼーション、ナショナリズム、ジェンダー等の現代的課題を解明する学問分野として、人類学の中心的問題に貢献する可能性が論じられるようになり、スポーツ文化を比較・スケール・変化の視点で理論化しようとする研究（Hildred & Crawley, 2023）やデジタル環境下で身体文化が再構築される過程を取り扱う研究（Heath, Hildred, et al., 2025）などが進展し、スポーツ人類学の国際的展開はより多様化している。

３．科学的知見の応用の状況

調査研究によって蓄積された、諸民族・諸文化の身体理論モデルやエスニックスポーツの情報は、様々な形で当該民族や当該社会へ還元される。例えば、エスニックスポーツの観光化についての調査研究成果は、当該地域の観光官庁等を通じて観光開発戦略に活用される。あるいは、エスニックスポーツや武術、舞踊、養生法が伝える伝統的なトレーニング方法が、現在の競技スポーツのトレーニングに応用されている。例えば、日本の武術家やインドのヨーガ修行者等が行ってきた瞑想法のスポーツ科学への応用は着実に進展しており、近年ではアスリート向けマインドフルネスアプリの開発・提供も進み、実践段階に入っている。あわせて、ウェアラブルデバイスやモーションキャプチャー等の計測技術の高度化により、伝統的身体技法を客観的な動作データとして記録・比較する研究も進み、スポーツ神経科学やスポーツ心理学との横断的な応用研究が本格化しつつある。そして、こうした知見は『体育学研究』や『スポーツ人類學研究』、刊行された書籍、オープンアクセス論文、SNS 等の多様なメディアを通じて、広く社会に発信されている。

４．学校体育や大学体育に活かすべき知見

近年の学習指導要領で、スポーツが“文化”として捉えられていることを踏まえると、世界のエスニックスポーツが中学・高校の教材として用いられることには様々な意義がある。エスニックスポーツの身体技法(身体の操作法)は当該地域の文化的特性を反映しており、これを実践することは、身体を通じた体験的な文化理解に寄与するだろう。また、エスニックスポーツや武術、舞踊、養生法の基盤となる諸民族の身体理論モデルには、健康保持のための様々な知恵が蓄積されており、近代体育理論を補完し、健康教育の多様化に寄与しうる。実際、大学体育では、合気道、太極拳、ヨーガ、カラリパヤット、アフリカンダンス、カポエイラに加え、近年ではカンフー、カバディ、モルック、ボッチャ、セパタクロー等を教材にした実技授業も行われている。加速するグローバル化に伴い、多元的な文化理解の重要性が高まる中、エスニックスポーツを活用した授業は、その要請に対して体育が独自の方法で応答できる可能性を示しているのである。

５．若手研究者へのメッセージ

加速するグローバル化は文化の均質化をもたらす一方で、文化の多様性を促進するような事象を巻き起こしている。また、心身の健康への関心の高まりは、スポーツに対する人びとの関心をますます高めている。こうした中、いかにスポーツや身体文化にかかわる活動が機能／変容しているのか、スポーツ科学と文化人類学の双方から生起する多様な課題の発掘と知見の提出が強く待たれる。

６．引用文献

Besnier, Nico., & Brownell, Susan. (2012). Sport, Modernity, and the Body. Annual Review of Anthropology, 41: 443-459.

Hildred, B., & Crawley, M. (2023). The Anthropology of Sport: New Modes of Theorising Comparison, Scale & Change [Editorial]. Journal of the Royal Anthropological Institute.

Heath, Sean., Hildred, Ben., Neuhaus, Henrike., Carter, Thomas F. (2025). Anthropology in Sporting Worlds: Knowledge, Collaboration, and Representation in the Digital Age. Vernon Press.

K.ブランチャード, A.チェスカ., 大林太良監訳, 寒川恒夫訳(1988)『スポーツ人類学入門』大修館書店.

寒川恒夫 (2004)『教養としてのスポーツ人類学』大修館書店.

寒川恒夫 (2013)『巻頭言・スポーツ人類学の現在』文化人類学研究, 第 14 巻:1-5.

（2026 年 6 月 30 日執筆）